

看図作文授業レパートリーの構成

鹿内 信善 森 寛 兒玉 重嘉 森 和穂
 中村 芳美 石田 ゆき

The Repertory of “Kanzu” Composition Practices

Nobuyoshi SHIKANAI, Hiroshi MORI, Shigeyoshi KODAMA, Kazuho MORI,
Yoshimi NAKAMURA and Yuki ISHIDA

看図作文授業レパートリーの構成

鹿内 信善¹・森 寛²・兒玉 重嘉³・森 和穂⁴・中村 芳美³・石田 ゆき⁵

The Repertory of “Kanzu” Composition Practices

Nobuyoshi SHIKANAI, Hiroshi MORI, Shigeyoshi KODAMA, Kazuho MORI,
Yoshimi NAKAMURA and Yuki ISHIDA

概要

現在鹿内らは、「聴覚障害児の言語活動を充実させる看図アプローチを用いた教材開発・授業開発」研究をすすめている。看図作文は看図アプローチに包摂される作文指導法である。このため看図作文用の教材開発と看図作文の授業開発も重要な研究課題となっている。しかし、聾学校は在籍児童数が通常の学校より少ない。このため聾学校だけの教材開発・授業開発には限界がある。そこで本研究では、聾学校での今後の看図作文授業実践に提供するための教材（絵図）開発と、その絵図を用いた授業開発を行っていく。複数の教員が同じ絵図を用いてそれぞれの考えに基づいて行った授業モデルを紹介する。さらに授業によって産出された作文も紹介していく。

I. 目的

現在鹿内らは、「聴覚障害児の言語活動を充実させる看図アプローチを用いた教材開発・授業開発（科学研究費16K04728）」研究をすすめている。「看図アプローチ」とは「見ること」を取り入れた授業づくりの方法である。看図アプローチの定義については、科学研究費研究計画調査にまとめてあるのでそれを再掲しておく。

看図アプローチと看図作文

英語圏の多くの国や地域では、「見ること」をカリキュラムの中に取り入れている。その目的はビジュアルリテラシーの育成である。「ビジュアルリテラシーとは、絵や写真、図表、動画といった視覚テキストを読み解き・発信する力のことである。（奥泉2006, p.38）」見ることを重視した教育は、中国でも行われている。中国語では、ビジュアルテキスト（絵図）を読み解くことを「看図」とよんでいる。また、絵図を読み解いた内容を作文として発信させる「看図作文」という方法も普及している。しかし現在中国では、看図作文の指導が形骸化し、看図作文が本来もっている教育効果を発揮できていない。そこで鹿内は、中国の看図作文を「ビジュアルリテラシーを育成していく方法」として洗練していく研究を行ってきた。鹿内は、中国の看図作文に心理学や物語論の研究

成果を取り入れ「新しい看図作文」を開発してきた。この研究から次のような成果が生まれてきた。「①読み解き活動を創発するビジュアルテキストの制作方法、②ビジュアルテキストを読み解く処理モデルの構成、③読み解き処理モデルを活用した授業づくりの方法、④ビジュアルリテラシーを育成する授業モデルの構築等々。」これらの成果を、作文教育以外の教育領域に適用していくことを「看図アプローチ」とよんでいる（鹿内2015）。

看図アプローチと看図作文の関係は図1のようになっている。

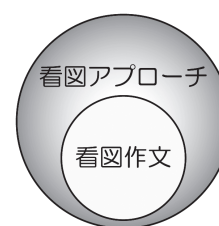


図1

絵図（ビジュアルテキスト）の開発

今年度は上記科研究費研究の初年度である。そのため、鹿内らがこれまでに開発してきた聴覚障害児を学習者とした看図作文授業モデルの聾学校での適用可能性を探ってきた（増谷他2017）。今後さらに実践研究を重ねていく必要がある。そのためにビジュアルテキスト等の教材開発やそ

¹ 福岡女学院大学

² 札幌市立西野中学校

³ 札幌市立本郷小学校

⁴ 札幌市立手稲山口小学校

⁵ 日本医療大学

れらを用いた授業モデルの開発が必要になる。しかし、「聾学校は在籍児童数が通常の学校より少ない。このため聾学校だけの教材開発・授業開発には限界がある。研究を促進するため、聾学校と他の学校との連携システムを整える必要がある。」このことも16K04728の研究計画調書に明記してある。

そこで本研究では、聾学校での今後の看图作文授業実践に提供するための教材（絵図）開発とその絵図を用いた授業開発を行っていく。複数の教員が同じ絵図を用いてそれぞれの考えに基づいて行った授業モデルを紹介する。さらに授業によって産出された作文も紹介していく。なおここで紹介する授業は、いずれも、それぞれの校種・学年の教育課程に位置づけられるように構成している。本研究で報告する授業では、次の絵図2枚かあるいは1枚を用いている。これらの絵図は、今回の研究のために本論文の第6筆者石田が制作したオリジナル作品である。

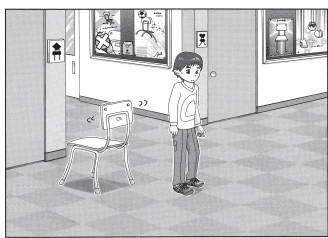


図2 絵図A

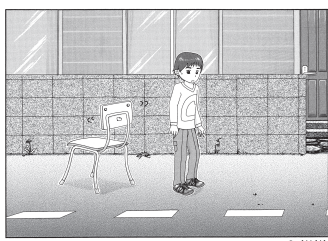


図3 絵図B

II. 実践

II-1 実践1

授業者および学習者

授業者は本論文の第2筆者森寛、学習者は中学2年生4クラスである。

授業の流れ

看图作文は1枚絵図を使っても複数絵図を使ってもできる。森寛は今回、絵図を2枚（絵図A・絵図B）を使っている。このため絵図A・Bを使った授業の前に別の絵図を使って「2枚の絵図で書く看图作文」の練習をしている。練習で使った絵図は鹿内（2014）に掲載されている「キリンとリス」である。「キリンとリス」を使った授業紹介は省略する。本稿では上掲絵図A・Bを用いた授業を紹介する。森寛の看图作文授業は、通常の国語

授業として行っている。そのため、今回の授業もいつも行っている「漢字テスト」から始まっている。

森寛の授業構成

- 1 漢字テスト（2～3分）
- 2 前回作文のシェア（10～13分）
 - ・前回書いてもらった「キリンとリス」看图作文の「優秀作品プリント」を配付。読みすすめながらその作文の「よいところ」について短いコメントをする。
 - ・前回作文の返却
- 3 本時の見通し
 - ・次の教示をする

「今日もお楽しみの【看图作文】です。今日は【近未来的な22世紀の絵】を持ってきました。この1時間もお楽しみに。今日のテーマは【素朴な疑問】です。絵を見て、『これって、何だろう？何だと思う？』と疑問に思うことをまわりの人にどんどん伝えてください。」
- 4 「絵図A」の読み解き
 - ① 「絵図A」の拡大図を黒板に掲示。次のように問いかけ、数名に答えさせる。「この絵を見て『これって、何だろう？何だと思う？』と疑問に思うことや素朴な疑問を教えてください。」
 - ② 「絵図A」プリントを配付。次のように指示し、「絵図A」プリントの余白に記入させる。「この絵を見て『これって、何だろう？何だと思う？』と疑問に思うことや素朴な疑問をなるべくたくさん書き込んでごらん。」
 - ③ 4人グループにして、最初の交流。次のように教示する。「このあとの交流で、他のメンバーの解釈を聞いて『なるほど！それはアリだな、いただき！』と思うことがキャッチできたら、赤ペンでメモを残しておきましょう。」
 - ④ 「素朴な疑問」と「赤ペンのメモ」を学級全体でシェアする。
- 5 「絵図B」の読み解き

「絵図B」についても、上掲「絵図Aの読み解き」と同様の、①～④のステップを繰り返す。
- 6 グループによる作文の構想
 - ・次のように問いかける。「こちらの絵とこちらの絵、どちらを先にすると他の人が『へえ～、すごい！』と感心するようなオリジナルなストーリーができそうですか。順番を決めたら絵図プリントの右上に、①・②と番号をつけましょう。」
 - ・おおかたの生徒が書き終わったら4人グループをつくって、まずは互いにストーリーを聞き合うようにする。次のように教示する。「話を聞き合うときのお約束があります。ひとつは、話を聞いて『いいね』と思ったところを具体的にほめてあげてください。もうひとつは、話を聞いて『これって、なあに？どういうこと？』と思ったところを具体的にっこみを入れてあげてください。『ほめる』か『つつむ』かどちらかです。ひと

りの話が終わったらそのお約束を果たしてください。4人の発表とホメホメ・ツッコミが終わったら話し合ったことをメモしててください。」

7 執筆開始

・原稿用紙を配付。次の条件を伝える。「条件が3つあります。ひとつめ。魅力的なタイトルを書きます。ふたつめ。前半・後半と絵が変わるところで、段落を変えます。3つめ。段落の上にAかBを書いてどの絵についてのお話しかわかるようにします。この時間に完成です。間に合わない人は今日中に提出です。」

以上は、4クラス共通の授業構成案である。実際はこの案をもとに各クラスの実状に応じたコミュニケーションをしながら授業をすすめていく。次にAクラスの導入部分の授業記録を載せておく。

- T なかなかね、このクラス優秀なんですよ。全然違う作文が生まれたの（※この時間の前にやった「キリンとリス」のこと）。優秀なので、今日はね、難しい絵を持ってきました。たぶんね、「発見」できないと思う。
- S 俺ならできる。
- T いや、無理だ！
- Ss （大笑い）
- T 発見できないと思うよ。そのくらい難しい絵を持ってきたので、今日はね、「発見」を言ってもらえません。「なぜ」を言ってもらいます。
- S えー、発見言ったら（不明）。
- T 発見できません。無理です！
- Ss できる！発見言ったら（不明）くれますか？
- T あげません！
- Ss （笑）
- T では、どんな難しい絵が来たのか…はい助手。（一番前の席の生徒を指名する）
- S （前に出てくる）
- S 絶対簡単でしょ。
- T 無理だと思うよ今日。
- S だからできるって。
- T 誰も今日作文書けないと思うよ。
- S 書ける！
- T じゃじゃじゃーん。（絵図A呈示）
- Ss 書けるわ、人がいる。老人ホーム？（口々にいろいろ言っている）
- T うんとね、これこうだと思えますって言わなくていいわ。ここちょっとわからないですってことを言ってください。OK？前に出てきて「これわからないです」っていうのもいいので、わからないこと言ってくれる？（列ごとに順に指名していく）
- S ポスター。の、椅子がボールで何か遊んでるみたい

な…けど。

- T わからない。なぜ。はい。
- S 椅子が動いている。
- T 椅子が動いているのがなぜ。はい。
- S 性別のマークが椅子になっている。
- T ちょっとなぜ。はい。
- S うんと、真ん中ら辺の左上の…
（後略）

以上のような授業によって生まれてきた作文を各クラス2編ずつ載せておく。なお森寛は400字制限で作文を書かせている。

作文例1 <絵図順B→A>

「気持ちを考えて」

僕はイライラしていた。友達とケンカしたのだ。その時僕は学校のイスをかけた。強い力だったらしくイスが曲がりカタカタと動いていた。それを見た先生は「イスの気持ちを考えなさい!!」と怒った。僕は思った。「イスに気持ちなんてないのだからべつに良いじゃないか。」僕は学校を飛び出して家に帰ろうとした。先生が走ってくるけど気にしない。そんな時声が聞こえた。「私の名前はチェア。」僕はおどろいた。そこには僕のかけた曲がったイスがいたのだ。そしてチェアはこう言った。「君をイスの世界につれていくよ。その白線をこえてみてっ。」僕は汗が流れおちた。気づかないうちに僕は白線をこえていた。

「ここどこ？」チェアが答えた。「イス学校だよ。ただの物体に見えると思うけど私達には心があるの。だから今日君にけられた時実はすごく悲しかった。」何だか僕は犯罪者の気分になった。みんな気をつけて。物には心があるんだよ。いきなり話し出すかもね。

作文例2 <絵図順A→B>

「イスのわくせい」

ここは、地球ではなく、イスのわくせいにある小学校です。イスが人間のように生活していて、色々な事を、学ぶ場所です。あるとき、イスの学校にふしんしゃが出ました。そしてイスのけいさつ官が、かけつけました。ふしんしゃは、顔があり、手があって、足もあります。イスのわくせいでは、ありえない物体です。そして調べてみると、人間ということが分かりました。イスのわくせいには、人間は出入り禁止なので、けいさつ官は、つかまえようとしてました。ですが、人間はなかなかすばやく、つかまえられません。

外に出ました。人間はつかれて、汗をかいています。そして、どこかの建物に入りました。あせっていたので、どこなのか見ていませんでした。すると、そこは、イスのけいさつしよだったらしく、つかまってしまうました。そして、その人間は、イスのわくせいに入ってしまったので、イスに変えられたそうです。

作文例3 <絵図順A→B>

「本人登場?!」

真ん中にいる人は、実は yuki.ishida である。なぜなら絵の右下に書いてある名前の最初に◎と書いてある。そしてこの人が着ている服にはCと書いてある。だからこの人は yuki.ishida なのである。しかしなぜ不思議そうな顔をしているのだろうか。それは、みなさんも知ってのとおり、yuki.ishida は不思議な絵を描く天才だ。yuki.ishida は子供のころある不思議な経験をしている。それは自分以外すべての生き物がいすになってしまったというできごとだ。仲の良かった友達がいすになりこどく感におそわれていました。

みんなは気づいたでしょうか。道路の白い線の太さが変わっている。これは、すべてのものがいすに代わるというサインだ。本人はとてもこわかったと言っている。これが子供のころの yuki.ishida が体験したお話である。これをきっかけに yuki.ishida は不思議な絵を描くようになった。

作文例4 <絵図順B→A>

「人間とイスが共存する世界」

ここは人間とイスが共存する世界。人間はCの部分を押すと変身でき、イスは紙の部分をめくると人間に変身できる。男の子は後ろからイスにストーカーされている。イスはこの男の子が大好きで、人間になると変に思われてしまうので、ペットとして飼ってほしいとついていっているのだ。「このイスが変身して変な人になったらどうしよう。」そんなことを考えながら、この世界を歩いていた。

イスの研究をする会社について。ちょっとトイレに行きたいな。と、ここのトイレは少し変わっている。男子イストイレ、女子イストイレに分けられている。部品のサビた部分を排出してトイレをしているよ。この会社では、ポスターの世界にも入ることができる。新品のイスになりたいときはきれいなイスのポスターに、サッカーをしたいときはサッカーをしているポスターに、オシャレをしたいときは、オシャレなポスターに入る。まだイスがついてきている。×のついてるポスターに入ろう!!

作文例5 <絵図順B→A>

「イスのニトリ」

「卵買ってきてー。」二階でゲームをしている僕の耳に母の声が入ってきた。「はい。」と言い、家から出てスーパーに向かった。スーパーに向かう途中、イスを見かけた。「ツレテイツテクダサイ」と書いてあるとれかけのシールが貼ってある。「どこに…?」通り過ぎようとする、と、「ニトリ!」と聞こえた。「ツレテイツテヨ!」…イスがしゃべっている。僕は仕方なくイスをニトリに連れていくことにした。話を聞くと、

外に出てみたら、迷ってしまったらしい。

ニトリに着くと、そこは僕の知っているニトリではなかった。何もかもがイス専用になっている。トイレも男用がひし形女用がハートのマークになっている。イスについていくとたくさんのイスがいた。イスは「ただいまー。」とか言っているけど僕はこわくなって足が動かなかった。そうすると、他のイスたちが、「人間?」とか言って、「イスに変えちゃえ!」と言い向かってきた。

作文例6 <絵図順A→B>

「不思議な恋ストーリー」

あるところに、恋する女の子がいた。女の子は階段を踏みはずして足を骨折してしまった。おどりの鏡を見ると、女の子はイスに変身していた。ちっとも女の子は怖がらなかった。掲示板にはあってある、映画のポスターが目に入った。その映画は、イスがヒーローになって戦う映画だった。「そっか、私はイスになったから頑張らないといけないのね。」女の子はイスに変身したことをポジティブに考え、好きな男の子に近づいた。男の子は、イスを見て、変な顔をした。

男の子は、イスがヒーローになって戦う映画を楽しむにしていたらしく、イスを気に入った。男の子はイスを家に持って帰って毎日使った。女の子は重い思いもしたけど、男の子が近くにいることが嬉しかった。女の子は、少し外の空気を吸いたくなった。男の子が外に出る時に、一緒に外に出た。しかし、また階段を踏みはずしてしまった。男の子が支えてくれた時には、女の子の姿だった。

作文例7 <絵図順B→A>

「イスジェネレーション」

僕はゆうき。今年社会人になったんだ。そして、横にいるのは、今、最も芸能界で輝いている俳優の「腰カケル」というイスだ。これからドラマの撮影があるのでスタジオに向かう途中だ。朝早くにむかえに行き、準備をし、バレないように、裏の住宅街を通ってきた。

そして一時間ほど歩き、スタジオについて。腰カケルは全然つかれていないが僕は、もうめっちゃつかれたよ。腰カケルはつかれる姿も見せず、いつもさわやかだ。かっこいい…。画面ごしも人気だが、裏でも人気だ…。まっ、それはおいといて、えっ…と。そう。午前は青春ドラマだから、^{ハート}♡の部屋で撮影だ。で、その後はサスペンスドラマの撮影だから^{ダイヤ}◇の部屋だ!もう、腰カケルがんばるなあ。で僕は廊下で待ってないと…。でも、やっぱり人気だな。ポスターいっぱいだけど、8割は腰カケルだよ。すごいな。あっ帰ってきた!おかえり!二人とも表情管理はできんけど、実は笑ってるいいコンビなんだ。

作文例8 <絵図順A→B>

「タンポポさんのおかげだよ！」
 私は、イス子。私には、ずっと昔、大好きだった、イス男というとってもさわやかで、やさしくて、おもしろくて、明るいイスがいた。私はイス男と両想いで、「リアジュウ。ヒューヒュー。」とその辺の道と一緒に歩くだけで声をかけられるほど有名だった。そして、けっこんを予定していた。しかし、ある日知らない男の子に私は買われてしまった。そしてイス男ともわかれなければならなくなった。とてもごんねんだ。「ねえ。そこのほくちゃん。なんで私を買ったの?」「えっそれは。使いやすいそうだったから。」ふつうの答えだった。
 私は、気分てんかんに、知らない男の子をさんぼにさそった。そして一緒に道を歩いていた。そしてタンポポさんが、「そこのラブラブさん。」と声をかけてきた。私は、ラブラブに見えるんだ。楽しそうに見えるんだと、思い、イス男とのわかれは、つらかったけど、知らない男の子とも仲良くしていけそう。いや仲良くしていこうと心に強くどめた。

森寛は、日本で一番多く看图作文授業を行っている教師である。森寛は数多くの、洗練された看图作文授業モ

デルを考案している。森の実践は、鹿内（2014）でも紹介されている。これらはすべて聴覚障害児の言語活動を充実させる授業づくりに活用できるものである。

Ⅱ-2 実践2

授業者および学習者

授業者は本論文の第3・5筆者兒玉と中村、学習者は小学校5年生2クラスである。

授業の流れ

教科書（光村図書）の「分かりやすく伝える」単元の中に位置づけて行った。2クラスとも次の指導案に基づいて授業を展開していった。この実践の工夫は2つある。実践1 森寛の授業では、絵図Aと絵図Bどちらを先にして物語をつくるのか、その決定は学習者にまかされていた。実践2では、絵図A→絵図Bのように書く順序を固定した。これが第1の工夫である。また絵図Aの物語を書き終えてから、はじめて絵図Bを呈示するようにした。これが第2の工夫である。子どもたちは絵図Aをもとにしてすでに書いてある作文内容と整合性をもたせながら絵図Bを読み解いていかなければならない。このように、作文産出にあたっての制約を多くしてある。これは、適

兒玉の指導案

	児童の活動	教師の支援
導入	①作文を書く「気持ち」を整える。 指示 「今日は、作文を書きます。作文と言っても、これから書く作文は、『絵』をよく見て書くものです。絵は、2枚あります。みんなには、どんなものが書いて、どのように感じたか出てくる人物の気持ちになって書きます。それでは、絵を見せます。」	・作文の説明をしながら、安心感を与える。(好きか嫌いかを問うのではなく、みんな好きになってくれるといいなあというニュアンス。)
展開① 15分	②書く材料をそろえる。 ・絵図Aを呈示する。 「何が見えますか？」 ・目に見えるものを考えて発表させる。 ・見えないものも、見えることを伝える。(いすの動きとか) ③「いつ?どこで?誰が?何を?」を(自分で設定する) ・いつ?・だれが?・どこで?・何を? ④作文を書く。 指示 次の絵に、何が出てきてもいいように、ここまでのストーリーを完結させて書こうね。	・黒板に、メモをする。 ・ペアで交流。(全体で共有) ・書くことが苦手な子への配慮をする。
展開② 15分	⑤書く材料をそろえる。 ・絵図Bを呈示する。 「何が見えますか？」 ・目に見えるものを考えて発表させる。 ・見えないものも、見えることを伝える。(いすの動きとか) ⑥作文を書く。 指示 最後は、ストーリーが楽しく終わるように書こうね。	・黒板に、メモをする。 ・ペアで交流。(全体で共有) ・書くことが苦手な子への配慮をする。
まとめ	⑦書いたことをグループで交流する。	(時間があれば)

度な制約は創造性を高めることがあるためである（例えば Finke 他邦訳1999）。

以上のような授業によって産出された作文を各クラス2名ずつ載せておく。

作文例9 <絵図順A→B>

イス月イス日僕は、イスの世界にまよいこんでしまった。僕の名前は、ただけどこの世界では、イス男とよばれている。この世界にきてもう1ヵ月たっている。僕の後ろにいるのは、イスだ。いっしょに中休みイスとおしくらまんじゅうをしている。この世界は、イスと遊んだりしゃべったりできるのだ。今日は、これで帰ろう。

ねえイス今日学校楽しかったね。今夜は、クリスマスだね。クリスマスプレゼントはイスのぬいぐるみだ。はやくほしいなあ。今日は、太陽のひざしが強いから外でいっぱい遊ぼうね。家まできょうそうだ。それに明日はイスの日だね。イスが楽しみにしてたよね。やったね。

作文例10 <絵図順A→B>

ある秋の季節の事です。ぼくが学校のろうかを歩いていると、とつぜん世界が変わりました。周りがまぶしく光っていっしゅんクラッと化したその時、ふしぎなイスが現れました。なぜか動いています。ぼくは、夢を見ているだけだと思ったけどやっぱりこわくてイスの方を見れませんでした。それでも、動いているのはわかります。ガタガタこっちに近づいてきてるようです。こわくてあせがでてきます。

走って家に帰ったぼくは、家の中に入ってゾワッとしました。なにか外にいるような…外に出るとなんと、さっきのイスがついてきていたのです。ぼくは、おもわず「あっちいけ！」と言ってしまいました。すると、そのイスはしょんぼりして帰ろうとしました。少しかわいそうと思ったぼくは、「まって!!」つい、また声のでてしまいました。するとそのイスは、元気にかけってきました。うれしくなったぼくは友達になろうと言って、毎日遊ぶようになりました。そして、名前もつけてあげました。「イイス」と。

作文例11 <絵図順A→B>

「いすとぼく」

「キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン。」学校のチャイムが鳴りました。「みんな、遊ぼう！」中休みが始まって一番最初に大声を出したのは、よしあきです。「いいよ！」みんなそういうとケシゴムを出して教室の中でドッチボールをし始めました。よしあきもしようと思い、ケシゴムをとりました。「あー！」手をすべらせて、ケシゴムを落としてしまいました。「めんどくさいなー。」と言いながらよしあ

きがケシゴムをとろうとした時、イスのうらに紙がはってあるのに気づきました。「なんだろう。」と言いながら紙をはがすと、「タイムスリップしたい人、イスが一番多い場所に集合！」と書いてありました。「なにこれ、本当か分からないけど、言ってみるか。」そう言ってよしあきはケシゴムをふでばこの中にしまい、多目的室に向かいました。「着いたー！」多目的室の中に入ってみました。すると急に光が飛び出してきました。「うわあ!!」よしあきはそのまま光の中にすいこまれてしまいました。「わあ、ここどこ？」よしあきは気付いたら、イスが動いて、トイレの標識もイスで、ポスターの絵もイスの所にいました。「何コレ!? イスだらけ!!」よしあきはびっくりしてぼうぜんとして立ちつくしていました。すると、そこにイスが動いて来ました。「やあ、こんにちは！君はよしあき君だね。僕は、スイだよ！」よしあきはイスがしゃべってると思い、びっくりしてしばらく体が動きませんでした。「はー。」（まずは冷静になろう。）「なんで、僕の名前を知ってるの？」よしあきはやっと声に出してしゃべり始めました。「そんな事は後で。」とイスは返しました。よしあきは、(てき当な返事だなあ。)と思いました。「それより大変なんだ。ちょっと付き合ってよ!! そしたら、君を元の世界に返すからさ。」そう言ってイスはげんかんホールの方に歩き始めました。よしあきは、「元の世界にもどれるなら。」と言い、決心をしてイスについていきました。

「あれ？」よしあきは不思議に思いました。「ねえ、スイ。」「何？よしあき君。」「どうして、ここは、元の世界の風景なの？僕は元の世界に帰れたの？」とスイに聞きました。すると、スイは「風景は元の世界みただけど、中はみんなイスで、イス達が住んでるんだよ。」と言いました。(ふーん。)よしあきはそう感じながら次の話題に変えました。「で、スイ、僕は何をすればいいの？」と聞くと、スイは、「実は…、いつもよしあき君が中休みにやってるドッチボールをやらなくてほしいんだ。」と言いました。よしあきは「えっ!!」と思わず声をあげてしまいました。だってドッチボールは、よしあきが一番気に入っている遊びですから。「やめろ」と言われても、急にはやめられません。こまったよしあきは「なんで？」と聞きました。すると、スイはしんこくそうな顔をして言いました。「だってドッチボールをしてる時、イスがじゃまでイスをけったり、すみっこに置いたりするし、ケシゴムが当たるととても痛いんだ。」と言いました。よしあきをせっとくするために、つけくわえて、「みんな痛いて泣いたりしてるんだ。しかも、大けがを負い入院してるイスもいるんだ。」と言いました。よしあきはもっこまりました。(自分がやめるだけなら、少しがまんすれば出来るけど、みんなに「やめなよ」って言うのもきらわれそうだし、どうすればいい

かなー。) よしあきがとてもなやんでいるのに気付いたスイはさらにつけくわえました。「ほら、クラスの女の子達もいやがってるでしょ!!」それを聞いたよしあきは、「確かに。」と言いました。最後にスイは「お願い。」と頭を下げようとしてバランスをくずして頭をうってしまいました。そのすがたを見たよしあきは、「よし、なんとかして、ドッチボールをやめさせよう。」とスイに言いました。すると、スイは、「ありがとう。じゃあ、これから君を元の世界に返すね。」と言って、スイッチを取りだしました。「いくよ、3, 2, 1, GO!」「ほち」。よしあきは、また、不思議な光におおわれました。気がつくよしあきは、もうスピードで教室に向かい、大きな声で言いました。「ドッチボールはもうやめよう!」と。すると男子達は、「は?」「なんでだよ。」と言ってきました。よしあきは、また大声を出して「ドッチボールなら、外でやった方がずっと楽しいし、女子達も、そっちの方がいいと思うんだ!」よしあきは(ぜったいきらわれる)と思いました。しかし、一人の男子が「そうだ!よしあきの言う事はあってる!」と言いました。すると、それに続いて、「そうだな!!」とよしあきの事を分かってくれる人が増えました。よしあきはうれしくてみんなに「ありがとう。」と言いました。「ありがとう。本当にありがとう。」と心にスイの声もひびきました。

作文例12 <絵図順A→B>

たくや君は、あるイスの世界に迷いこんでしまいました。まわりにはっているポスターには、イスがのっています。「ここはどこだ? イスがいっぱい…。」と、たくや君が言うと、とまっていたイスがふり向いて、「私はイスのいっちゃんです。ここは、イスの世界なんです。」とイスがしゃべりました。たくや君はおどろきました。「君って、い、イスだよね…?」とたくや君が言うと、いっちゃんは、「あたりまえですよ。私はイスのいっちゃんです。」と言いました。たくや君はふしぎに思いました。

たくや君はまた、人間の世界にもどってきました。すると、いっちゃんもうしろからついてきました。「いっちゃんもついてきたの?!」とたくや君が言うと、いっちゃんは、「私はイスの世界にいたとき、イスのお友達がいなくて、さびしかったから…。」と泣きながら言いました。たくや君は、「ごめん!もう帰らないと…」という言葉のみこみ、「いっしょに家で遊ぼう!」と言うと、いっちゃんは、「イスのすがたの私と、遊んでくれるの?! 本当にありがとう!」と言い、2人はお友達になり、毎日、仲良く楽しく遊びました。

実践2は、2つのクラスとも、看图作文の授業を初めて受けている。初めての経験であるが「書くことがない」

「どう書いていいかわからない」という子どもはひとりもいなかった。これは、これまでの看图作文実践研究と同様の結果である。

実践2では1枚目絵図の作文を書き終えてから2枚目絵図を呈示している。子どもたちは、2枚目にどんな絵図が出てくるかまったく予想ができない状態で、作文の前半を書いていることになる。そのような状態で2枚目の絵図を呈示されているにもかかわらず、前半(絵図A)と後半(絵図B)で整合性のある作文が産出されている。

さらに、実践2ではふたりの教師が看图作文授業を行っている。このうち中村は今回初めて看图作文授業をする教師である。教師も学習者も看图作文に取り組むのは初めてである。それでも中村は、看图作文授業の経験が豊かな兒玉と同じように授業ができています。また中村のクラスで産出された作文の内容も「わかりやすく伝える」という授業目標を達成できている。さらに読む者に「おもしろい」と感じさせる作文が多く産出されている。

II-3 実践3

授業者および学習者

授業者は本論文の第4筆者森和穂、学習者は小学校6年生1クラスである。

授業の流れ

教科書(光村図書)の『『鳥獣戯画』を読む』『この絵、わたしはこう見る』単元の中に位置づけて行った。森和穂は、絵図Aのみをビジュアルテキストにしている。森はこの他にもたくさんの工夫を行っている。その主なものを紹介していく。

看图作文およびその発展形である看图アプローチは、ビジュアルテキストの情報処理モデルをもっている。ビジュアルテキストの処理は変換・要素関連づけ・外挿の3つの活動によって行われる。これらは次のように定義される。①変換(translation)とは、テキスト中で記述されている概念や内容を別のことばに言い換えたり、ある種の記号表示法を他の表示法に変えたりする活動である。②要素関連づけ(interpretation)は、テキストを構成している諸要素を相互に関連づける活動である。③外挿(extrapolation)は、テキスト中で記述されている内容を超えて、結果について推量したり結果を予測したりすることにより、発展的に考えていく活動である。このうち変換によって取り出される情報が「もの」である。要素関連づけ・外挿によって取り出される情報は「こと」に相当する。ビジュアルテキストを読み解くためにはこれら3つの活動によって「もの」と「こと」を取り出す必要がある。看图作文・看图アプローチでは、これを「ものこと原理」とよんでいる。看图作文を書かせるためには子どもたちに変換・要素関連づけ・外挿活動をさせなければならない。しかし、子どもたちにこれらの説明を理解させることは難しい。そこで森和穂は、「も

の」とは「何」のことであり、それは「主語」になるものだ、という説明をしている。「こと」は「どのように」に相当し、「述語」になるものだと説明している。そして「もの」と「こと」を取り出すことにより「1つの物語ができる」ということを、鳥獣戯画をビジュアルテキストにして学習させている。この授業に1時限用いている。

この授業のまとめの板書が写真1である。

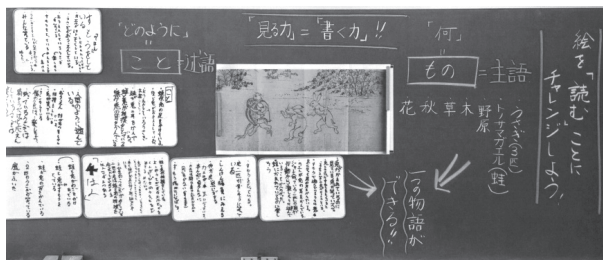


写真1

森和穂は「ものこと原理」を子どもたちも理解できるように再構成して伝えているのである。また、ものは主語、ことは述語、という説明によって「ものこと原理」を文章構成の技法として活用できるようにしている。このように、看图作文・看图アプローチの理論をもとに「森和穂式授業づくり」を行っている。これが実践3の最大の特徴である。教師たちが独自の工夫をつけ加えていくことにより、看图作文・看图アプローチによる授業づくりレパートリーが広がっていく。

森和穂は写真1で例示した方法をそのまま用いて、絵図A（イスの絵図）をビジュアルテキストにした看图作文授業を行っている。その最終板書が写真2である。



写真2

このように森和穂はビジュアルテキストの情報処理モデルを活用して授業を組み立てている。さらに同型の授業を反復している。ビジュアルテキスト情報処理モデルを授業づくりのモデルにすることによって学習者は「見る学力（ビジュアルリテラシー）」を育てていくことができる。また毎回の授業で読み解いた内容を作文にまとめている。それによって森和穂が設定していた「見る力＝書く力」という目標が達成されていく。森和穂の授業で産出された作文を2つ載せておく。

作文例13 <絵図A>

「こ、校長先生～。な、なんか、変なのがいちたんですよ～！」
何だ？何の話だ。
「私も見ました。なんか、二本足で立ってて、なんか

この前テレビで見たイッタンモメンみたいに平べったくて、頭がもじゃもじゃしてましたよ。」

…ふだんまじめな子まで…。

「校長先生も見に行ってくださいよ～。」

…なんか危ないヤツかもしれないな…。ちょっととおくからでも見てみるか。と、私、この学校の校長、[石田鈴夫]は軽い気持ちでなぞの変なものを見にいきました。が、子ども達が群がってさわいでいるまがりかどをこえたところに……53年生きてきた私でも見たことのない、イッタンモメンというより、猿おやじに似た、新種のイスカロボットと考えられるなぞの生物(?)が…。

「…けど、この学校の校長として、このなぞの生物(?)を外に出すか、せめて話を聞かなければ…」そう思った私は、勇気を出して話しかけてみる事にした。

「…あの…、スイマセン。あ、あの…あなたは…」

すると相手は「はるらおにる？(なんだこいつ?)」

意味が分からない。本当に何なんだろう、この生物(?)は。すると、なぞの生物はかべに向かって走り出した。

「えっ？何やってるんだ？」かべにぶつかると思ったしゅんかん、すう～っと変な生物(?)はかべの向こうに消えていった。

「????」

…とにかく変な生物(?)は、すごいヤツらしい…。

作文例14 <絵図A>

ある日の放課後教室を出ると、「ジッザーザジ」。そんな音がろう下にひびいた。いつも見ているはずのろう下がちがうと男の子は思った。前に進むと犬のように歩くイスがいた。そのイスは「イスイス？スイイ？」といった。これはイス語？男の子は、困った。そのイスは男の子にびっくりしているようで、イス語？で話しかけてくる。男の子はさっき入ってきたとびらをさがした。でもきえていた。イスがけいじ板を足でたたいた。

すると…「ゴーゴー」という音をたてながらけいじ板が動きはじめた。するとドアがあらわれた。男の子はおそろおそろ入った。するとそこは、見おぼえのあるろう下だった。

「かえれたんだ。」そういい男の子は、げんかんへむかった。するとそこに、あのイスがいた。イスが話しかけてきた。

「イスイススイイ？」とイス語でいった。

「ぎゃーなんているのー。」そうさけぶと、男の子はイスにすわった。すると

「イスー…」イスはきえた。男の子は、あのイスと世界はなんなのか考えながら家へかえった。。すると家にあのイスが……いた。

森和穂は、絵図Aを用いた看图作文授業のあと、さらに独創的な授業を試みている。その様子が写真3である。



写真3

写真3に写っている板書は写真2の板書とまったく同じ構成になっている。写真3は、写真2の板書から絵図Aに関する内容を取り去ったものである。この板書はビジュアルテキスト読み解き用に構成したものである。また、絵図Aが貼ってあった場所には「鳥獣戯画」を貼っている。森和穂はこれからビジュアルテキスト読解方法をそのまま用いて文章読解指導を行おうとしている。写真3はその様子を写したものである。ここで使う文章テキストは、教科書に載っている『『鳥獣戯画』を読む』という説明文である。

今回は、残念なことに時間切れで、この授業は完結しなかった。しかし森和穂が行おうとしていたことはきわめて意義のあるチャレンジである。森和穂は、ビジュアルテキストの読解と文章テキストの読解を往還させたまったく新しい授業を創り出そうとしていたのである。

Ⅲ. 考察

ビジュアルテキストとして用いるのは種類の絵図であって様々な授業を構成できる。また森和穂が試みたように、ビジュアルテキストの読解指導と文章テキストの読解指導を往還させるという新しいスタイルの授業づ

くりもできる。さらに産出される作文も多様である。そのことを本稿では見てきた。

本稿で紹介した作文は、「オリジナリティーがあっっておもしろい」と筆者らが判断したものである。紙数の都合で各クラス2編の作文に限定して紹介した。しかし、ここで紹介しきれない「オリジナリティーがあっっておもしろい」作文は他にもたくさん産出されている。創造性心理学では、出現率が5%以下の反応をオリジナリティーが高いものと評定している（『新編創造力事典』参照）。看图作文を用いると創造性心理学が想定しているよりもはるかに多くの頻度でオリジナリティーの高い作文が産出されている。聴覚障害児の書記日本語能力を向上させるためのみならず、産出された作文のオリジナリティーを高める指導法モデルとして今回の実践結果を活用していきたい。

文 献

- Finke,R.A. 他 小橋康章（訳）1999『創造的認知』森北出版株式会社
- 増谷梓・阿部ゆかり・手塚清貴・田中瑞穂・鹿内信善 2017「聾学校小学部での看图作文の実践—日本手話を活用した日本語指導—」『福岡女学院大学紀要人間関係学部編』第18号, 99-109
- 奥泉香 2006「『見ること』の学習を、言語教育に組み込む可能性の検討」リテラシー研究会（編）『リテラシー2—ことば・文化・社会の日本語教育へ—』くろしお出版
- 鹿内信善（編著）2014『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ協同学習の新しいかたち●看图作文レポーター●』ナカニシヤ出版
- 鹿内信善 2015『改訂増補協同学習ツールのつくり方いかし方—看图アプローチで育てる学びの力—』ナカニシヤ出版
- 高橋誠（編著）2002『新編創造力事典』日科技連

注1—本研究は科学研究費16K04728の助成を受けた。

注2—本論文に掲載した絵図は授業等営利を目的としない活動で活用可能である。

